



TITLE:

# シュンペーターにおける「資本主義過程」の探究

AUTHOR(S):

八木, 紀一郎

---

CITATION:

八木, 紀一郎. シュンペーターにおける「資本主義過程」の探究. 経済論叢 1984, 134(3-4): 159-177

ISSUE DATE:

1984-09

URL:

<https://doi.org/10.14989/134046>

RIGHT:

# 經濟論叢

第 134 卷 第 3・4 号

---

哀 辞

故 豊崎 稔名誉教授遺影および略歴

経営戦略論に関する若干の考察(3)……………降 旗 武 彦 1

シュンペーターにおける「資本主義過程」

の探究……………八 木 紀 一 郎 31

マーケティング・チャネルにおける組織間

管理理論：一つの修正モデル……………高 橋 秀 雄 50

公共企業体としての国鉄の出発……………張 風 波 70

インフレーションの波及過程について……………金 谷 義 弘 90

追 憶 文

豊崎 稔先生——人と業績——……………寺 尾 晃 洋 109

豊崎先生と奈良……………小 野 一 一 郎 114

---

昭和 59 年 9・10 月

京 都 大 学 經 濟 學 會

# シュンペーターにおける 「資本主義過程」の探究

八 木 紀 一 郎

## I

シュンペーターは、彼の若年の主著『経済発展の理論』のモチーフを、英語圏および日本の読者に対して説明するときに「過程」という言葉を用いている。たとえば、「自分が研究を進めていく中できづいたことは、すべてのこれらの現象〔利子、景気変動、企業者利潤、貨幣、信用等〕が、ある画然たる過程の単なる派生事にすぎないこと、またこれらの現象を説明するある簡単な原理がこの過程そのものを説明するであろう、ということであった。」〔1934〕「私は、時間の中における経済的変化過程の理論的モデルを構築しようと試みた。」「経済体系それ自身によってうみだされる画然たる過程としての経済進化のヴィジョン」〔1937〕、というようにである。

この〈過程 process〉という言葉は、『経済発展の理論』のドイツ語のテキストの中では、「経済過程」Wirtschaftsprozess とか「発展過程」Entwicklungsprozess とかの複合語の中にかくれることが多く、単独でもちいられる場合には、たいていは Vorgang あるいはその複数形の Vorgänge になっている。それが英語で、まとめられて〈過程 process〉とされたわけである。しかし、時間の中での事態の進行として経済現象を把握するというのは、シュンペーターの思考の鋳型のようなものではないかと思われる。

たとえば、彼はワルラスの一般均衡理論を賞賛し、最初の著書『理論経済学の本質と主要内容』でそれを紹介したが、彼自身の問題にそれを利用する際には、こうした理論も、時間の流れの中におかれて、均衡への接近あるいは回復

の運動過程を表現するものとして位置づけられたのである。〈静態〉というは無時間的なもののように思えるが、シュンペーターの場合は、そうではない。

〈循環 Kreislauf, circular flow〉ですら、時間の中の過程であって、ただそれが定型化され、反復される諸経済行為の連鎖からなり、そのようなものとして時間を捨象した均衡体系に表現されたり、帰属理論のような経済的評価を受けたりしているにすぎない。それにたいして、彼のいう〈動態〉は、もちろんのこと、方程式体系に時間項はいるというような形式的なことではない。それは時間の中でおこなわれる経済諸主体の行為の連鎖に定型化されない創造的行為が含まれ、それによって諸主体にとっての環境自体の変化がうみだされる過程である。それは、従来の均衡＝循環を破壊することであるが、同時に、新たな静態的な適応過程による次の均衡への接近の前提条件である。こうした説明でもわかるように、シュンペーターは均衡をも〈過程〉化したのである。

しかし、〈過程〉を、時間の中での事態の進行というように説明的にいいかえるとしても、時間のスパンをどれほどに設定してそれをみるか、また、どのような空間的・社会的ひろがりにおいてそれをみるか、という問題が残る。私は、シュンペーターの場合には、おおよそ次のような三つのレベルで〈過程〉が問題にされているのではないか、と思う。

その第一は、それぞれの経済主体の行為の連鎖からなる、いわば個別的な過程であって、「経済過程」Wirtschaftsprozess と一般に表現されているものであるが、ドイツ語の Vorgang というのは、そうした諸経済行為の前後・連鎖関係を示すものとして、ヨリ直接的である。ともあれ、これは、その中で各経済主体の個々の行為が意味をもち、諸種の経済現象がその機能を発揮するひとまとまりの過程だといってよいだろう。新結合の遂行とそのための金融は、こうした個別的過程の典型である。

第二には、視点を個別の経済主体からひろげて、諸主体のそれぞれの経済行為、個々の Vorgang が統合されてうまれる一つの〈総過程〉である<sup>1)</sup>。シュン

1) この点については、『発展』の第六章だけでなく、初版第七章および、それをひきついだ第

ペーターは、ドイツ語の *Prozeß* をこのレベルにあたるものとして、好んで用いているように思う。好況や不況といった景気循環の個々の局面がそれにあたる。そこでは、諸主体の経済行為の相互作用の中で価格体系が変化し、諸主体の競争と整理・淘汰がおこなわれる。この第二のレベルの〈過程〉の理解においては、異質の主体や異質の *Vorgänge* の統合が問題であり、シュンペーターは、これらの諸主体・諸過程の相互作用から景気循環を説明しようとしたのである。

そして、最後には、景気循環の個々のサイクルをこえた変化を示す「大きな経済的・社会的過程」〔発展：下265頁〕である。シュンペーターが「資本主義は、その成功によって滅びる」という周知の鬼面人を驚かせるような命題でいおうとした、個人的企業家精神の衰退、資本主義の擁護者の消滅、私有財産の実質の消失等々の事態は、こうした「大きな過程」にかかわるものである。

しかし、シュンペーターにおいては、第一のいわば個別過程と第二のいわば総過程は異質なものではない。前者を説明する原理が後者をも説明するのであり、それからひきだされる巨視的な歴史考察が第三の「大きな過程」なのである。その点からいえば、シュンペーターの視点は、本来ミクロな個別過程にあるのであって、それはケインズやマルクスとは異なるものである<sup>2)</sup>。

経済現象を時間の中での事態の進行としてみる視点は、彼にとっては、理論と歴史を媒介する視点でもあった。したがって、『経済発展の理論』には、そこでえられたヴィジョンを実証し、歴史認識にまで高める研究が後続するのは当然であった。二十数年の後に、その著作（『景気循環論』1939年）が完成したときに、彼は、こうした三レベルにわたる経済過程をその歴史的特性によって特徴づける言葉として、〈資本主義過程 capitalist process〉をえらび、それを

二版以降の第二章の記述を参照せよ。

2) シュンペーターの *Vorgang=process* としての「過程」は、マルクスのいう「その現実的諸条件の総体において考察された一発展」〔Marx：②331頁〕としての「過程」とくらべると、ヨリ狭い。マルクスの場合には、過程は空間的・社会的にひろがり文字どおり「総過程」をなすのに対して、シュンペーターの場合には、時間軸にそった行為の経過=成り行きという、いわば個別過程的な性格が強いように思える。

副題（「資本主義過程の理論的・歴史的・統計的分析」）にとりいれた。本稿は、シュンペーターのこの〈資本主義過程〉の探究がどのようなものであったのかを、第一次大戦前の青年期（彼自身にとっての「神聖で実り多き十年」！）を中心に明らかにすることを課題としている。

## II

『経済発展の理論』の各版への序文をよみくらべると、ドイツ語各版の読者をつきはなすような調子にくらべて、英語版につけられた序文〔1934〕のシュンペーターは——日本語版への序文とともに——うってかわってにこやかである。彼は、異なる家風の家に娘を嫁がせる親のように、自分の著作の生い立ちとその目標を理解してもらおうと心をくだしている。私達は、まずこの序文〔発展机上版：22頁以下〕を読むことから、本稿の課題にとりかかりたい。

「本書に述べられた思想の一部は1907年にまで遡るが、1909年にはすでにそのすべてが完成されていた。そのころ、資本主義社会の純粹経済的特徴に関する私の分析の一般的輪郭は形を整え、それ以降実質的にはなんらの変更も受けていない。」

ここで、「一般的輪郭」といわれているものは、すぐあとで「ヴィジョン」ともいいかえられている。いわば、経済学的分析の用具についての進歩は認めるとしても、その用具が用いられるべき「ヴィジョン」としては変更の必要はいささかも無いといっているわけである。そして、その「ヴィジョン」が成立したとされるのは、シュンペーターの20代半ばの1907年から09年であった。そうすると、私達は彼が当時どのような精神的環境のもとにあり、どのような理論的関心をもっていたかということに注意を払わなければならないことになるであろう。

「私がほぼ四半世紀前に利子および景気回転理論の研究を始めたとき、私はこれらの題目がたがいに結びついているとか、また企業者利潤、貨幣、信用、その他同類のものと密接な関係をもっているとは考えていなかった。

それはまさに私が当時の議論の潮流にしたがったためである。しかし、やがてすべてのこれらの現象——ならびに多くの第二次的現象——がある画然たる過程の単なる派生事にすぎないこと、またこれらの現象を説明するある簡単な原理がこの過程そのものを説明するであろうということが明らかになった。」

これは、前項でとりあげた「過程」という言葉の登場する個所である。ここではシュンペーターの研究過程について、1) シュンペーターの当初の計画では、利子理論と景気回転理論が並列していたが、後にそれが統合されたこと、2) それを統合したのは、「ある画然たる過程」の認識であり、それとともに、企業者利潤、貨幣、信用、その他の統一的認識も可能になったこと、が述べられている。ここに示唆されることは、シュンペーターの『経済発展の理論』——あるいは彼の〈資本主義過程〉の「ヴィジョン」——の理解にとっては、初発の二つの問題が彼の探究にとってそれぞれにどのような役割をもったかを考察することがキー・ポイントとなる、ということである。

「『ある画然たる過程』を基礎に先の諸経済現象を統合して構想される」この理論体系を、従来、明示的にも陰伏的にもつねに伝統理論の中心であり、現になおそうであるところの均衡理論と対比することが有益であるという結論が得られた。私は、最初はこの二つの理論構造に対して『静態』と『動態』という述語を用いた。」

これは、先のような認識をうけての彼独自の理論体系の構想である。シュンペーターによれば、古典派にしてもオーストリアンにしてもワルラスにしても、その理論構造はみな静態的であって、先のような経済諸現象の理解をはじめから排除するものであった。それに対して、均衡を破壊し、経済体系を変化させる過程についての動態的理論が要請されるのであった。しかし、注意すべきことは、すでに指摘したように、この〈静態〉〈動態〉はシュンペーターの場合、方程式体系に時間項が入るかどうかというようなことではなく、それ自体として二種の異質の〈過程〉の表現であった。現実の経済過程には、動態的

な発展を担う主体もいれば、環境に適応するだけの静態的主体も存在する。また、前者が優越的な局面もあれば、後者が優越的な局面もある。むしろ、〈静態〉と〈動態〉は、現実の経済過程を構成する二要素あるいは二側面なのである。

「この区別が有効であることは、経済学の領域をこえた場合にさえ明らかであった。たとえば、重要な点において本書の経済理論と著しく類似した文化的進歩の理論とも呼びうる領域においてそうである。この区別そのものは、多くの非難に遭遇している。しかし、ある会社を維持することにもなう現象と、新しい会社を創設することにもなう現象を分離することは、果して現実に対してまったく不忠実、あるいは恣意的であろうか。」

ここでは、シュンペーターの自己弁護の筆ははからずも彼の「ヴィジョン」の背後にあるものを語りだしているように思える。〈静態〉と〈動態〉の二要素あるいは二側面が、経済過程だけでなく、他の分野をも貫徹するものであるというのは、彼の分析がヨリ一般的な彼の社会観＝「一つの指導者社会学」の経済分析への応用であることを示唆する。また、同一主体においてもそれが区別されうる例として、会社の創設と維持をもちだす点は、シュンペーターの〈資本主義過程〉の「ヴィジョン」の社会的・歴史的基盤を示すものかもしれないからである。

### III

それでは、〈資本主義過程〉に関するシュンペーターの「ヴィジョン」の形成期にあって、利子理論と景気理論という二つのテーマの研究は、一体どのような役割を果たしたのであるだろうか？ この問いに答えるためには、当時の学界の諸潮流において、この二つの問題がどのように扱われ、それに若きシュンペーターがどのような態度を示していたかを知らなければならない。

まず、景気理論についてみることにすると、この20世紀初頭は、いわば、19世紀型の恐慌論から景気変動あるいは景気循環論に脱皮していく時期にあた



る<sup>3)</sup>ことに注目しなければならない。シュンペーターは『発展』の初版序文で、自分は1905年に恐慌問題から出発したと述べているが、彼はまさに、こうした動向を体現しているのである。

こうした動向は英米にもみられるが、ドイツ語圏でそれを主導したのは、理論的な経済学者よりも、マルクス主義および歴史学派の経済学者たちであった。そうした動向の中で、焦点となったのは、第一には、不況はそれに先行する好況の結果であるというジュグラーの主張であり、第二には、資本主義の高度化とともに恐慌もその性格をかえるであろうというマルクス主義内部の「ヴィジョン」再検討の動きである。再発見されたジュグラーの著作は、景気の波動のメカニズムの研究に経済学者を誘い、バルンシュタインのマルクス理論修正以来のマルクス主義陣営の議論の渦は、巨大企業と金融機構を考慮した資本主義論の構築を促していたのである。

時代の流れに鋭敏な感覚を持っていたゾンバルトが、1904年の論文で、恐慌研究は、資本主義の運動形態の問題をとりあげ、景気理論に拡大されなければならない、と提唱したのはこうした動向を察知したからであろう。歴史学派の景気理論研究は、彼よりもむしろシュピートホフによっておこなわれ、彼自身が達成したものはいわば歴史的な経済社会学であったが、シュンペーターは後にゾンバルトの主著の書評をおこなう際に、景気理論におけるゾンバルトの展望の先見性を賞賛するのを忘れなかった。〔1927 a: S. 360〕青年時代のシュンペーターは、ゾンバルトと共通の展望をもっていたに相違ない<sup>4)</sup>。

学生時代のシュンペーターの周囲でも、恐慌問題は一種のトピックであった。ヒルファァーディング、パウアー、レーデラー、ソマリー、ミーゼスといった彼の学友達は、みなそれぞれに恐慌—景気理論に取り組んでいたか、あるいはそ

3) この動向を概観したものとして、Hutchison: Chap. 23 を参照されたい。

4) シュンペーターのゾンバルト評価については、その他にも『本質』〔上67, 下370頁〕や『発展』第二版以降の第二章冒頭〔上165頁〕を参照せよ。私は、資本主義論や企業者論の社会的側面においては、シュンペーターはしばしば比較がおこなわれるヴェーバーよりもゾンバルトに近いと思う。

の後に取り組むことになった。1900年と1907年の恐慌は、彼等に格好の研究材料を与えたことであろう。私は、今、そうしたことの詳細についてふれるつもりはない<sup>5)</sup>が、ともかく景気回転の研究において、シュンペーターは時代の流れを呼吸していたといえるであろう。

恐慌論あるいは景気理論はたしかに時代の風潮であったが、それはアカデミックな理論経済学への入口としてはおそらく不向きであったろう。シュンペーターにとっては、利子論の研究がその役割を果たした。シュンペーターは、1905～06年にバウム＝バヴェルクに直接師事することができたが、彼はその創造的才能はおとろえていたものの、なお頑強な論争家でありつづけていた。バウムの主著『資本および資本利子』は利子論の研究を志すシュンペーターに格好の練習台を提供したであろうし、その上、バウムは数年にわたりシュンペーターにとって庇護者の役割をも果たしてくれたのである。

当時の利子論の動向をみると、1880年代にバウム＝バヴェルクによって提出された理論は、ヴィクセルやフィッシャーによって数学的に洗練化され、論争をへながら、一般均衡理論の枠の中に統合されていく過程にあったといえてよいであろう。利子は静態においては存在せず、その根拠は経済の動態に求めなければならない、というシュンペーターの主張もこうした当時の理論動向に対する回答として考えるべきである。それは、ワルラス流の一般均衡理論を静態理論として承認しながら、そこに利子の存在根拠を問うバウムの批判を適用し、むしろ、動態においてバウム流の問題提起を救済しようとするものであった。従来の理論の静態への純化による完成、そのうえで動態において新地平を開くことが時代の課題と考えられたのである。

こうした状況の中で興味深いのは、シュンペーターのJ・B・クラークに対

5) とりあえず、ヒルファーディングとシュンペーターを対比した八木を参照されたい。しかし、シュンペーターに刺激を与えた点では、オットー・パウアーの方が重要であろう。なお、私はこの前稿で、これらの俊秀が集ったバウムの演習を1905/06冬学期としたが、ウィーン大学アルヒーフに保存されている講義目録では、この冬学期に開講されたのは、講義 *Nationalökonomie* であって、演習 *Übung* が開かれたのは、1906夏学期になっている。

する態度である。なぜなら、クラークは1899年の『分配論』で静態と動態を区別し、利子は静態的所得範疇であるが、利潤は動態的所得範疇であるという主張を提出していたからである。シュンペーターは、この著作を1906年に『クラーク教授の分配論』で紹介し、動態理論を約束した次著『経済理論の精髓』の書評を1908年におこなっているが、クラーク理論の理論的検討はむしろ1907年の論文『分配理論におけるレント原理』でおこなわれている。

この1907年論文では、シュンペーターはクラークの限界生産力論をリカード的な地代＝剰余理論の一般化としてとらえて、限界効用理論とその帰属理論による拡張によって完成された価格理論と両立不可能な体系化であるとみなす。同じ年に、師のベームも、『最近の資本および資本利子論文獻』という論文で、クラークの理論は、結局自分のかつて批判した利子＝生産力説への復帰であると断じていた。資本財の物的な生産性も時間に関する正の心理的プレミアムをとまなわなにかぎりは、資本利子をうみだすことはない。既知・既存の資本財の生産性は、その用役あるいはその総体である資本財価格によって評価されているのであり、時間打歩のないかぎり、その価格はその資本財の生産に要した本源の投入（労働および土地）への報酬に還元されてしまう、というのである。したがって、ここには二つの道しか残されていないことになる。第一は、静態にも時間打歩を承認することであり、第二には、探究を新しい地平に移して、むしろ、利子を動態的所得範疇である企業者利潤から派生するものとみなすことである。ベームとシュンペーターはここで分かれたのである。

当時の通念にしたがえば、恐慌——景気はもちろん動態的現象であったが、利子は静態的現象であった。いや、静態・動態という区分自体が一般化されていない事情を考慮するならば、前者は、経験的・歴史的研究領域に属したが、利子論は均衡モデルにくみこまれた理論領域に属していた、というべきであろう。したがって、両者が統合されるには、利子理論が動態に移され、また、恐慌——景気論も現象の記述から脱皮して理論化の方向に進むことが必要であった。恐慌——景気問題の理論的焦点は、好況過程において何が進行しているの

かということであった。利子論の課題は、動態における企業者利潤と利子の関係、つまり動態過程における企業者と資本家の関係に移された。動態における利子を説明する原理が好況を説明し、それが景気理論にまで拡張される展望が成立したとき、シュンペーターの「ヴィジョン」は完成をみたのである。

#### IV

「企業者と資本家」というのは、カイロから帰国してヴィーン大学の私講師となったシュンペーターが1909/10年冬学期の講義目録において予告した講義テーマであった。この講義は、彼のチェルノヴィッツ赴任によって実現しなかったものと考えられるが、彼の「ヴィジョン」がまさに成立しつつある段階での彼の関心の所在を示すものとして、興味深い。

その2年後に完成した『発展』では、資本主義発展の動態的過程が、銀行による信用創造によって支えられた企業者の革新活動の中軸として説明された。企業者の役割は、既存の生産要素の結合（旧結合）を破壊して、それを組替えて新製品・新生産方法・その他生産および販売過程の新組織を実現することである。こうした新結合にかんしては、静態的な価値帰属が可能ではないから、そこには「剰余価値」＝企業者利潤がうまれる。利子は、企業者の新結合遂行のテコとなる資本（購買力基金）を供与する資本家に対する報酬であり、また、好況一不況は、こうした新結合の群生的出現とそれにひきつづく経済体系の適応・淘汰の過程として説明できる。しかし、新結合の遂行のための購買力（資本）は、旧結合の中に統合された領域にはこれを求めえないから、その基本部分は新しく創造されなければならず、その供給機構が銀行だということである。

私は、『経済発展の理論』におけるシュンペーターのこうした回答を、「ヴィジョン」として検討するためには、シュンペーター自身の選んだ講義題目である「企業者と資本家」という枠組みが有効ではないかと思う。なぜなら、この両者の像および両者の関係は、本来、複数の「ヴィジョン」を可能とするのであり、そうした選択可能な複数の「ヴィジョン」との対比でシュンペーター

のそれを特徴づけることができるからである。

「企業者と資本家」という視点からシュンペーターのヴィジョンを考察するとき、まずきづくのは、そこにおいては、企業者の像はきわめて鮮明であるのに対して、資本家の像はそうではないということである。シュンペーターにとって、既存の経済学への不満は、それがマーシャルやクラークのように動態をめざしている場合にあってすら、そこには「エネルギーな契機」、別の表現でいえば、「前進の意欲の契機」「“effort”の契機」が欠けているということであった。〔1908 a: 下186, 489頁〕1908年のクラークへの書評でいうように、たとえ、クラークのあげる経済変動の五つの原因（人口増加、資本増加、生産方法の変化、生産組織の変化、欲望の変化）のすべてに変化がみられないとしても、シュンペーターにとっては発展は存在するのであり、それは環境への適応ではなく、事業をなすことそのものを意欲する主体が経済生活の中に存在するからであった。この主体がいうまでもなく、企業者であった。

しかし、企業者がそのように動態過程の主人公の役割を果たしうるのは、資本家という脇役が存在するからである。企業者がもつのは、新結合の構想力とそれを実現するための堅忍不拔の意志であるが、資本家は彼に対してその活動のための手段（生産要素の購買＝支配手段）を与えるのである。これを別の側面からみるなら、資本家が所有面でのリスクを負担することによって、企業者は純粋な「行為の人」になることができるのである。資本家は、その意味では、動態においてのみ登場し、企業者への奉仕によって所得を獲得する存在である。しかし、その一方では、所有者としての資本家は、所有あるいは享楽に利害関心を有し、過程において受動的な存在にとどまる。したがって、『発展』の初版第七章は、資本家に「準静態的経済主体」という中間的地位を割当てた〔1912: 369頁〕が、第二版以降ではこうしたいささかあいまいな規定は姿を消している。こうした資本家の人格喪失は、企業者への資金供給が、私的資本家によってではなく、銀行によっておこなわれる（「銀行が唯一の資本家になる」〔上198頁〕）という想定に対応したものである。しかも、資本家像の変貌はこ

れにとどまらない。銀行は、シュンペーターの体系においては、既存の資産所有者の信用を仲介するのではなく、それ自体が購買力である信用を創造する機関として位置づけられている。いいかえれば、銀行は企業者のための社会機関であって、背後に存在する資産階級（「利子生活者階級」）の代表ではない。さらに、成功した企業者が銀行から借り入れた資金を返済するならば、資金を貸付け、利子をうけとる資本家自体が過程から消失することになるのである。

ここで、私達は、シュンペーターが〈資本主義過程 capitalist process〉という時、何を意味していたのかを、確認する必要がある。それは、新結合の遂行が購買力の介入によっておこなわれることであり、資本は、企業者の必要とする財貨を旧結合から引き抜く支配手段（購買力基金）として把握されている。これは、資本を発展過程における機能の面から規定したものである。静態においても、もちろん所有者は存在するであろう。しかし、定常的な循環をくりかえす経済のもとでは、資本の貸借は存在しないから、利子は成立せず、また、企業者利潤も存在しないから、その源泉も存在しない。いいかえれば、資本および資本家は、〈過程〉の中で一時的に登場するだけの存在なのである。それに対応して、資本は蓄積されるものというよりは、企業者の必要に応じて創造されるものになるのである<sup>6)</sup>。

こうした議論の中で、新結合の遂行という企業者の機能自体は、はじめから前提されていることに注意しよう。それは、シュンペーター体系において、企業者自身はなんら資本主義的ではないということである。彼のもちいる手段が、流通経済という環境に対応して資本主義的であるにすぎないのである。シュンペーターは、企業者を「指導者」とも呼んでいるが、「指導者」の活動は、それ以外の主体（「大衆」）を、ともかく何等かの手段を用いて、強制することである。政治の場合は、それは権力やイデオロギーであろう。集産主義的経済においては、経済面においてもまた、直接的命令が「指導者」の手段となるかも

6) シュンペーターによれば、企業者のための信用創造は好況期においてインフレ傾向をうみだすが、新結合の成果たる生産物が市場に登場し、企業者が債務を返済しはじめると、事態はむしろデフレに転ずるという。[上280頁以下]

しれない。〈資本主義過程〉においては、その手段は、貨幣あるいは信用に体现された購買力であって、それに対応して、企業者＝指導者が他の人々を強制し、影響を与える様式も特有のものになっているのである。

シュンペーターは『発展』の第四版序文〔1935〕で、自らの理論を「経済分析に应用された一つの指導者社会学」というように表現した。このシュンペーターの社会学の源泉と性格については、様々な推測がおこなわれているが<sup>7)</sup>、ともかくそれが、社会が能動的な要素と受動的な要素にわかれ、前者が発展を、後者が停滞を体现するというエリート主義的なものであることは間違いない。

しかし、シュンペーターの「ヴィジョン」の検討は、こうした企業者像<sup>8)</sup>を論じるだけにとどまるわけにはいかない。私達は、すでにシュンペーターにおける資本家の像の不明確さを指摘したが、その点をいま少し具体化して、資本家—企業者の関係を考えてみたい。

資本家—企業者の関係として、まず考えられるのは、A. 両者が同一個人である場合と、B. 個人資本家と個人企業者の提携である場合、であるが、シュンペーターはこれを資本主義の歴史的初期のものとしなす。他の個所でシュンペーターがいうように、「銀行信用の制度は、資本主義体制が機能するうえに欠くことを得ないもの」〔1946〕であるから、資本家は銀行（家）におきかえられなくてはならない。しかし、このC. 銀行（家）—企業者においても、すでに示唆したように、代替的な「ヴィジョン」がありうる。

その第一（Ci）は、銀行（家）の背後に貨幣資産を蓄積した「利子生活者」Rentner の階級を想定する場合である。「利子生活者の経済学」というのは、後にブハーリンがオーストリア派の経済学を特徴づける際に用いて有名になった表現であるが、シュンペーターは明らかに、この「利子生活者」支配という

7) März 1965: S. 380; 金指: 第三章; 大野: 第五・九章。シュンペーター自身が企業者の社会学について語ったものとしては、1928が重要である。なお、1909夏学期に私講師シュンペーターが用意したウィーン大学での講義の一つは社会学であった。（講義目録には、シュンペーターによるものとして、「初心者のための経済学入門」とならんで、「科学的社会学の成立とこれまでの達成」が記載されている。）

8) 最近のすぐれた業績として池本を参照されたい。

「ヴィジョン」の成立可能性を予想している。〔下158頁〕しかし、この「ヴィジョン」は、彼にとって企業者の革新活動を否定しかねないものであり、また、経済過程の分析を、マルクス流の資本一賃労働という階級的搾取関係の図式に封じこめるものであって、何よりも拒否しなければならないものであった。彼がそのために用意した防衛線には、消極的なものと積極的なものがある。前者は、資本所有といえどもそれは自動的に財産が維持されるのではなく、企業者活動の成否に依存しているということであり、これによって「利子生活者」の利害を企業者のそれに従属させようとするものである。後者としては、銀行は、信用創造をおこないうるから、既存の資産の蓄積に依存せずに企業者の要求にこたえうということである。初版での資本家の「準静態的主体」としての規定を消去して、資本家の個性を抹消したのも、こうした防衛線の延長であったかもしれない。

しかし、必ずしも既存の「利子生活者」階級を前提しない場合でも、(Cii) 企業者ではなく銀行＝金融資本の支配という「ヴィジョン」が成立しうるかもしれない。これは、ヒルファーディングのそれであった。銀行の企業者への信用供与が、産業資本への銀行資本の支配あるいは融合をもたらし、それが金融と産業の両面にわたる集中と組織化をもたらすというものである。ヒルファーディングの『金融資本論』は、シュンペーターの『発展』の二年前に公開されているが、シュンペーターのこうした金融資本論的ヴィジョンに対する態度はかならずしもはっきりしていない。彼は、資本主義の発展が帝国主義をもたらすとか、独占の発展が資本主義を安定化させるとかいった系論には異議を唱えている〔1919〕<sup>9)</sup>が、産業の独占化の進行や金融資本の意義の増大はこれを事実として承認していたように思える。おそらく、シュンペーターはヒルファーディングやバウアーの（彼のいう「新・マルクス主義」）を一定程度評価し、それ

9) シュンペーターの帝国主義論に対する一つの解釈は伊東に提出されている。また März 1981: S. 114 は、大戦前のハプスブルク帝国の外交にヴィーンの金融界が影響力をもった証拠はないとして、シュンペーターの見方に賛同している。



が古典的なマルクス主義からの脱皮につながるのかどうかをみとどけようとしていたものと思える。したがって、この型の「ヴィジョン」に対するシュンペーターの態度を確定するには、後年の独占論や社会主義必然論を検討しなければならないが、とにかく、『発展』においては、シュンペーターはヒルファディングと異なり、企業者が主導し、銀行は企業者を選別しながら彼の資金需要にこたえるという側面を強調したのである。

第三の (Ciii)、企業者主導の資本主義「ヴィジョン」については、もはや多くを語る必要はないが、シュンペーターにおいて企業者がいかにして銀行（あるいは資本家）から自立するかの説明を補足しなければならないだろう。それは、成功した企業者は、借り入れた資金を返済しうらだけでなく、創業者利潤を獲得することによって、めざましい財産形成を果たすということである。シュンペーターによれば、現代における財産形成はその主要部分において企業者活動に依存するのであって、営々とした蓄積や節欲によるものではないのである。財産を形成して「利子生活者」＝資本家に転化したかつての企業者も、投資のしかたが悪ければ、没落を免れない。したがって、階級論についても、財産階級論というよりは、一種のエリート周流論になる。財産を基準として編成されているかにみえる社会の上層階級も、究極的には企業者としての能力の有無によってその成員が交替する「乗合自動車」あるいは「ホテル」のようなものだというのである。〔下57頁〕

## V

最後に、マルクスとの対比をてがかりに、シュンペーターの〈資本主義過程〉の探究の成果をまとめてみたい。

私は、シュンペーターの企業者の機能はそれ自体をとってみればなんら「資本主義的」ではないと述べたが、景気変動の波をもつくりだしながら、生産組織を革新していく「創造的破壊者」としての彼の企業家像に先行するものとしては、経済学史上では、やはりマルクスの資本家像以外には思いうかばない。

シュンペーターは、企業家は動態の主体であって、所有や享樂を行動原理としているのではないと論じたが、マルクスの資本家もそうである。彼は、資本の不断の自己増殖運動と一体化しているのであり、また、それを競争によって強制されているのである〔Marx: ②293, ④921頁〕が、こうしたマルクスの資本家のとらえかた（「資本運動の人格化」）も、シュンペーターの企業者のとらえかた（「変動機構の担当者」〔上170頁〕）と共通するものをもっている。

両者はいずれも、「無限の支配欲」につきうごかされているというほかない人間であり、伝統の破壊や変動過程の摩擦に頓着しない人間である。しかし、マルクスが「資本家」ととらえたものを、シュンペーターが「企業者」ととらえたことは、当然にも両者の〈資本主義過程〉の見方への差異の表現である。マルクスの資本家が〈過程〉をとおして次の発展のための基礎となる資本蓄積を実現するのに対して、シュンペーターの企業者はただ新結合を実現だけである。次の段階の発展にとっては、それはもはや新たな企業者にとって破壊されるべき旧結合にすぎないのである。シュンペーターは、自分の「資本」の概念は、生産に対する支配手段であるという点でマルクスと共通性をもつ〔上344頁〕としているが、シュンペーターの資本は、永続性のない機能的概念であって、マルクスのような蓄積された価値ストックの運動体ではない。いいかえるならば、シュンペーターの〈資本主義過程〉は、資本の所有と蓄積が捨象され〈過程〉そのものに純化されているのである。

したがって、シュンペーターの「ヴィジョン」に社会性を与えるためには、

- 10) いま一つ補う必要があるのは、労働者の像であるが、シュンペーターは労働者にふれることはきわめて少ない。「企業者職能と労働者利害」と題する論文〔1927 b〕は例外的であるが、そこでは企業者と労働者の間には本質的な利害の対立は存在せず、両者の対立の実体はむしろ指導者と被指導者間の権威と規律をめぐる争いであるとされる。たしかに、企業者は低賃金に関心をもつが、それは彼が低利率に関心をもつと同様であり、終局的には、労働者の利害も資本家の利害も企業者の革新活動に依存しているのである。そうした枠の中で、企業者は労働者に対しては資本家の利害を代表し、資本家に対しては労働者の利害を代表しているにすぎない。——以上のような見方も面白くないではないが、一体どれほどの実態認識に基づいたものなのだろうか？ こうした点については、終生シュンペーターの友人でありつづけた社会主義者レーデラーの仕事を含む、当時の産業社会学的研究の成果を検討する必要があるのかもしれない。

企業者だけでなく、資本家の像をそこに加えなければならない<sup>11)</sup>。私達がそこで発見したことは、銀行と金融市場の整備を前提とした場合でも、そこにはシュンペーターのような企業者主導の「ヴィジョン」の他に、「利子生活者」支配や、金融資本支配という代替的な「ヴィジョン」がありうるということであった。特に、前者は「準静態的」な所有者階級の支配としてシュンペーターの「ヴィジョン」を決定的に脅かすものといわなければならない。シュンペーターは企業者の革新が銀行の信用創造にささえられるものとみなすことにより、これらの代替的「ヴィジョン」を回避しようとしているが、信用創造にも一定の準備が必要であること、また成功した企業者が借り入れ資金の返済をおこなうには、証券市場に遊休貨幣資本が堆積していることが必要であることを考えると、それは必ずしも成功しているとはいえないであろう。利子についても、もし資産家階級＝「利子生活者」主導の視点にたつならば、シュンペーターとは別の理論化がありうるであろう。また、ヒルファードィングの提出した、金融・産業機構の組織化の進行とそれを誰が支配するのかという問題にも、シュンペーターは解決をつけていない。こうした代替的な「ヴィジョン」の検討あるいは統合の問題は、マルクスを継承する側でも現代的課題に属するであろう。

E. シュトライスラーは1980年11月にウィーンでおこなわれたシンポジウムで、シュンペーターの青年時代のオーストリアでは、企業家の社会的地位は低く、金融機関も信用供与によって産業発展を振興するという役割を果たさなかったことを指摘した<sup>11)</sup>。彼によれば、こうした保守的社会、つまりオーストリア的な「利子生活者」社会への反発がシュンペーターの「ヴィジョン」を生んだことになる。私達の考察はシュンペーターの探究過程をたどるトルソーにとどまったが、そのような社会的・文化的背景の解明によって豊かに肉づけされることがのぞましいであろう。

11) Streissler. シュンペーター理解におけるこうした視点が、E. メルツを経由して、オスカー・ランゲから伝えられたものであることは興味深い。世代の差異はあるが、ランゲはマルクス主義と近代経済学の双方に通暁した中欧知識人として、シュンペーターを容易に理解できたと思われるからである。また、吉田もこの点で参照されるべきである。

## 利用文献一覧

- AfSwSp: Archiv für Sozialwissenschaft und Sozialpolitik*  
*ZfVSV: Zeitschrift für Volkswirtschaft, Sozialpolitik und Verwaltung*  
*JbGVV: Jahrbuch für Gesetzgebung, Verwaltung und Volkswirtschaft*  
 Böhm-Bawerk, E. v. 1907. "Zur neuesten Literatur über Kapital und Kapitalzins." *ZfVSV* XV, XVI.
- Bukharin, N. I. 1919. *Politicheskaya ekonomiya rantie*. Moskw. (小林良正訳『金利生活者の経済学』白楊社, 1928)。
- Hilferding, R. 1910. *Das Finanzkapital—Eine Studie über die jüngste Entwicklung des Kapitalismus*. Wien. (岡崎次郎訳『金融資本論』全三冊, 岩波文庫, 1955—56)。
- Hutchison, T. W. 1953. *A Review of Economic Doctrines 1870—1929*. Oxford. (長守善・山田雄三・武藤光朗訳『近代経済学説史』上下, 東洋経済新報社, 1957)。
- 池本正純. 1984. 『企業者とはなにか—経済学における企業者像—』, 有斐閣。
- 伊東光晴. 1965. 「シュンペーター」, 内田義彦他編『経済学史講座3経済学の展開』, 有斐閣。
- 金指基. 1979. 『J・A・シュンペーターの経済学』, 新評論社。
- März, E. 1965. "Zur Genesis der Schumpeterschen Theorie der wirtschaftlichen Entwicklung." *On Political Economy and Econometrics. Essays in honour of Oskar Lange*. Warsaw.
- . 1981. *Österreichische Bankpolitik in der Zeit der grossen Wende 1913—1923*. München.
- Marx, K. 1867—94. *Das Kapital*. 3 Bde. (長谷部文雄訳『資本論』全13冊, 青木書店, 1951—53)。
- 大野忠男. 1971. 『シュムペーター体系研究』, 創文社。
- Schumpeter, J. A. 1906. "Professor Clark's Verteilungstheorie." *ZfVSV* XV.
- . 1907. "Das Rentenprinzip in der Verteilungslehre." *JbGVV* XXXI.
- . 1908 a. *Das Wesen und Hauptinhalt der theoretischen Nationalökonomie*. München und Leipzig. (大野忠男・木村健康・安井琢磨訳『理論経済学の本質と主要内容』上下, 岩波文庫, 1983—84)。
- . 1908 b. "J. B. Clark. Essentials of Economic Theory, 1907." *ZfVSV* XVII.
- . 1912. *Theorie der wirtschaftlichen Entwicklung*. Leipzig. (第7章「国民経済の全体像」佐瀬昌盛訳, 玉野井芳郎編『シュムペーター社会科学の過去と未来』, ダイヤモンド社, 1972)。

- . 1919. "Zur Soziologie der Imperialismen." *AfStwSp* XLVI (都留重人訳『シュンペーター帝国主義と社会階級』岩波書店、1956所収)。
- . 1926. *Theorie der wirtschaftlichen Entwicklung. Eine Untersuchung über Unternehmerrgewinn, Kapital, Kredit, Zins und den Konjunkturzyklus*. 2. Aufl. München und Leipzig. (塩野谷祐一・中山伊知郎・東畑精一訳『経済発展の理論』上下、岩波文庫、1977——本文中の参照ページはことわらないかぎり、この岩波文庫版による——机上版1980は各版序文も収録)。
- . 1927 a. "Sombarts Dritter Band." *JbGVV* LI.
- . 1927 b. "Unternehmerfunktion und Arbeiterinteresse." *Der Arbeitgeber* 17. Jg. Nr. 8.
- . 1928. "Unternehmer." *Handwörterbuch der Staatswissenschaften*, 4. Aufl. Bd. VIII.
- . 1934. *The Theory of Economic Development: An Inquiry into Profits, Capital, Credit, Interest, and the Business Cycle*, translated by R. Opie, with a preface by the Author. Cambridge, Mass.
- . 1935. "Vorwort zur vierten Auflage." *Theorie der wirtschaftlichen Entwicklung*. 4. Aufl. Berlin.
- . 1937. "Preface to Japanese Edition."『経済発展の理論』中山伊知郎・東畑精一訳、岩波書店。
- . 1939. *Business Cycles: A Theoretical, Historical and Statistical Analysis of the Capitalist Process*. New York and London. (吉田昇三監修、金融経済研究所訳『景気循環論—資本主義過程の理論的・歴史的・統計的分析—』全五冊、有斐閣、1958-64)。
- . 1948. "Capitalism." *Encyclopaedia Britannica*, Vol. IV. (大野忠男訳『シュムペーター 資本主義と社会主義』、創文社、1973)。
- Sombart, W. 1904. "Versuch einer Systematik der Wirtschaftskrisen." *AfStwSp* XIX.
- Streissler, E. 1981. "Schumpeter's Vienna and the Role of Credit in Innovation." *Schumpeterian Economics*, edited by H. Frisch. Praeger Publishers.
- 八木紀一郎. 1983. 「ヒルファァーディングとシュンペーター」、『経済セミナー別冊シュンペーター再発見』。
- 吉田昇三. 1956. 『シュムペーターの経済学』、法律文化社。